

## 山姥の解体と再構築：子どもの本の主人公としての山姥

谷口, 秀子  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5548>

---

出版情報：言語文化論究. 19, pp.171-178, 2004-01-31. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## 山姥の解体と再構築

—— 子どもの本の主人公としての山姥 ——

谷 口 秀 子

### 1. はじめに

近年、日本の絵本や児童文学において、山姥が主人公である作品が目立っている。ごく最近の作品には、富安陽子の『まゆとプラブカブー —— やまんばのむすめまゆのおはなし —— 』（2001）と『ドングリ山のやまんばあさん』（2002）をはじめとして、征矢かおるの『なないろ山のひみつ』（2002）などがあり、そこに、現代の新しい山姥像を見ることが出来る。

そもそも、山姥は、民話の世界に登場する恐ろしい異形の存在であり、「深山に住み、怪力を発揮したりすると考えられている伝説的な女」<sup>1)</sup>である。山姥は、ぼさぼさの髪が特徴であり、老女であることが多く、山に迷い込んだ里人を食べる場合もある。また、山姥は、人里離れた山の中にひとりで住み、里の社会や人々との一切の接触を絶っているため、里の社会の規範の制約を受けることがない。さらに、山姥は、女性ではあるものの、里の社会に属していないため、里の社会を支配している家父長制や家制度とは無縁の存在であり、それらに都合良く作られたジェンダーの拘束からも自由である。また、山姥は、超人的な身体能力を備えているため、ある意味で、ジェンダー化された里の女性像にはない迫力と力強さがある。

このような山姥が、最近の子供向けの作品に、主人公としてたびたび登場するのは、どのような理由からであろうか。また、その中に描かれている現代の山姥像とは、いかなるものであろうか。

### 2. 力強い女性主人公としての山姥

最近の絵本や児童文学に登場する山姥は、基本的には、民話の世界の山姥像を下敷きにしている。以下にあげる水田宗子による山姥の定義は、民話における山姥の位置づけを端的に表している。

（山姥は、）里の男が女の本質的な力と考える、産む力、育てる力、母性、豊穡な身体すべてを持ちながら、同時に、その力が過剰であり、里の女の性役割から逸脱している。里の女が持つべき「女らしさ」、つまり、貞淑、従順、慈悲、寛容、謙譲などの徳目を欠落し、自由奔放で逞しく、荒々しく粗野で、自己の欲望が明確

で、感情や自己主張が激しい。怒らせると里の人々を襲い、懲らしめ、破壊もするし、理由なく悪さもするが、何かの時、非日常の時には、神のような超人的な力で、里の人間を助けたり、救ったりする。里に棲もうとしないが、里に敵意を持っているわけではなく、気が向けば山から下りてもくる。何よりも山の女は里に入りたいと望まず、その存在を里に依存しない。山姥は、里の規範に照らしての解釈も、定義づけも不可能であり、したがって、コントロールや教育も不可能な、里の男の手に負えない女なのである。<sup>2)</sup>

このような山姥は、多少の変更を施されて、現代の絵本や児童文学作品の中に登場するようになる。子どもの本の中の現代の山姥は、民話の山姥の特徴を、少なからず、受け継いでいる。ほとんどの作品に共通する山姥の特徴は、民族学で言うところの里、すなわち、町や村のコミュニティーではなく、人里離れた山の中に住んでいることである。また、特徴的なぼさぼさ髪、里の女性とは異なる服装、裸足であることなどは、本来の山姥像にほぼ忠実である。また、現代の山姥が、多かれ少なかれ、普通の人間とは異なる超人的な力を有していることも、民話の山姥と同じである。

絵本や児童文学における現代の山姥が民族学的な山姥と大きく異なる点は、現代の山姥には、邪悪なところや恐ろしさが全く認められず、むしろ、純真無垢であるとすら感じられることである。また、多くの絵本や児童文学の女性主人公が、いわゆる「女らしさ」や因習的に女性の特質とされる優しさや弱さや受動性を強調されることが多いのに対して、山姥を主人公とする作品は、主人公の行動力や力強さを強調しているのが特徴的である。

山姥を主人公にした作品を創作し続けている富安陽子の『まゆとブカブカブー —— やまんばのむすめまゆのおはなし —— 』（2001）の主人公まゆは、山姥の娘であり、赤いぼさぼさの髪と野性的な服装という、山姥に特徴的な外見を備えている。まゆは、人里離れた「きたのおやまの てっぺんの さんぼんすぎの きのした」<sup>3)</sup>の小さい家に母親とふたりで住んでいる。まゆの活動の場は、その山の中であり、作品では、まゆが雨の中、外に飛び出し、水たまりでどろんこになって喜ぶ様子が生き生きと描かれる。従来、このような活発で躍動感のある主人公は、男の子の場合が多いのであるが、まゆは山姥の娘であるため、因習的な「女らしさ」からかなり逸脱しても、読者に全く違和感を抱かせないのである。また、まゆは、「女の子らしからぬ」勇氣と行動力で、森の動物たちが恐れおののく赤い帽子の怪物ブカブカブーに挑みかかり、難なく退治してしまう。この力強さも、まゆがジェンダー化されたヒロインたちの対極にあることを示している。

征矢かおるの『なないろ山のひみつ』（2002）では、「山おんな」（山姥の別称）の孫娘さちが主人公である。さちと祖母は、山姥に特徴的な外見を全く有しておらず、さちの祖母が「山おんな」であり、その孫であるさちが、祖母の跡を継ぐべき「あたらしい山おんな」であることは、作品の結末近くまで、さちにも読者にも伏せられている。とは言え、さちの勇氣と行動力は、普通の女の子を主人公にした作品においては、あまり見られないものである。山姥であるさちの祖母は、なないろ山を少し上った山の中にひとりで住んでおり、さちは、毎日のように祖母の家を訪れ、母親に「山でばかりあそんでいて、いまに山おんなになってしまうわよ。」<sup>4)</sup>と言われるほど、山の中を元気に楽しく走り回り、祖母から不思議な子守歌など、いろいろなことを教えてもらう。ある時、山に異変が起こ

り、山のじいさんぎつねから、祖母に助けを求める連絡が入るが、折悪しく、さちの祖母は、急に身体の具合が悪くなる。そのため、さちが、祖母に代わって、じいさんぎつねの所に行くことになる。さちの力強さは、恐怖を感じることなく、ひとりで山道を進んでいくことや、その際に、顔を打ち付ける小枝を気にしない様子や、フクロウやサルにひどい目にあっても、全く落ち着いて対処し、服が泥だらけになっても一向に構わず、暗い穴の中にも潜り込んでいく様子に表れている。このような、他者の危機を救うために、自らの危険を省みず、ひとりで冒険の旅に向かう主人公像は、男の子である場合が多いが、山姥の血を引くさちは、「女の子は、人を助けるのではなく、人に助けられるもの」という、ステレオタイプを打ち破り、課された冒険を成し遂げる。そして最後に、さちは、機知を働かせて、祖母から習った不思議な子守歌を歌って、「なないろ山のいのちのもと」である石を救い、山を守ることに成功する。さちが山姥であることは、結末近くまで明らかにされないものの、このような、山の危機を救うために、ひとりで冒険を成し遂げるさちの物語が、ひたすら「女らしさ」を要求される因習的な女性主人公像とは異なる、力強さや主体性を感じさせるのは、さちが山姥であるという設定と無縁ではない。

富安陽子の『ドングリ山のやまんばあさん』（2002）は、296歳の山姥が主人公である。主人公のやまんばあさんは、ドングリ山の頂にひとりで住んでいる。やまんばあさんは、ぼさぼさの白髪頭で、裸足であり、服装も特異である。また、山の麓の町（里）とは、全く関わりを持たず、100年くらいの間、山から下りたことがない。作品では、やまんばあさんが山の中という自然の中で暮らすことを大いに楽しんでいる様子が描かれる。また、やまんばあさんは、超人的な身体能力を有しており、「オリンピック選手よりも元気で、プロレスラーよりも力持ち」<sup>5)</sup>であり、大きなアオダイショウに呑み込まれたカラスのひなを救い出す怖い物知らずの勇氣、イノシシを軽々と持ち上げるほどの怪力、驚異的なジャンプ力、そして、時速80キロで走る車をも追い越すほどの脚力を持つ。上で述べたふたりの山姥の主人公と同様、やまんばあさんは、山姥であるために、特殊な能力を付与され、「女らしさ」に全く縛られない行動力と力強さを兼ね備えた主人公となっている。ここには、通念的に信じられている老人や女性の弱さがみじんも感じられない。

このように、主人公としての山姥は、どうしても女性の主人公に課されがちな「女らしさ」の押しつけや女性ジェンダーから主人公を解放し、元気な女性像を創造する手段として用いられている。本来、里の社会から隔離されているために、里の規範に縛られない「他者」としての存在であった山姥の、ジェンダーにも因習にも家父長制にもとらわれない生き方が、主体性を持った行動的で元気な女性主人公の創造を可能にしているのである。この時、山姥は、例えばシンデレラのような、極めてジェンダー化された因習的な女性像のアンティテーゼとなる。山姥が、ジェンダーに縛られない多様な女性像を提示したいと考える女性作家に好まれるのは、このことによるのである。

### 3. 山姥と男装

山姥を主人公にした作品は、主人公をジェンダーの制約から解放し、「女らしさ」にとらわれない主体的で行動力のある自由闊達な女性像の提示を可能にしている。山姥の娘ま

ゆも、「山おんな」の孫であるさちも、やまんばあさんも、因習的な弱い受け身の女性像とは対極にいる主人公であり、因習的には、「男らしい」特質とされる行動力や勇気や力強さを有している。

女性の主人公を女性のジェンダーから救い出すもうひとつの手段として、男装がある。この手法は、主に少女漫画において用いられることが多く、代表的な作品に、手塚治虫の『リボンの騎士』と池田理代子の『ベルサイユのばら』がある。また、山中恒の少年少女向け小説、『おれがあいつであいつがおれで』における男女の入れ替わりも、一種の男装と女装である。また、英米においては、文化や宗教の影響により、男装を扱った作品は多くないものの、イギリスの Barbara Cartland によるロマンス小説 *Tempted to Love* や、アメリカの作家 I. B. Singer の *Yentl the Yeshiva Boy* などの作品がある。

男装を扱った作品においては、主人公が男性ではなく、男装した女性であることは、読者には最初から明らかにされている。しかしながら、主人公の両親などごく一部の例外を除いて、作品中の他の登場人物には、主人公が女性であることは、秘密にされる。そのため、男装の女性主人公は、人前では、常に男性として振る舞うことが要求される。特に、少女漫画の場合、男装した女性が、運動能力などの身体能力において、普通の男性をうち負かすほどの能力を持つように設定されている場合が多い。例えば、『リボンの騎士』の男装の主人公サファイアは、剣の名手である。このような男装した女性が、ジェンダーの制約なしに、大活躍をするという心地よさが、男装を扱った少女漫画にはあり、女性読者の人気を博しているのである。

ジェンダーから自由になるという点では、山姥も男装の女性登場人物も同様である。しかしながら、男装の女性が男性という記号を借りて、女性のジェンダーから自由になるのに対して、山姥は、男装の女性がそうであるような、男性のペルソナを強要されることなく、女性としての制約から自由である。すなわち、男装の主人公は、男性になりきって、男性として振る舞うことにより、男性のジェンダーにとらわれてしまい、いわゆる女性の特質とされる面を表面に出すことが出来なくなる。(その事が、主人公の内的に引き裂かれた状態を引き起こし、特に、男性との恋愛の場面で葛藤を生むことになる。) このような、自らの女性性を否定して、男性の記号を借りた、いわば名誉男性としての自由の獲得は、実はその女性がジェンダーの枠を越えたことにはならないばかりか、逆に男性のジェンダーにとらわれることにすらなるのである。

山姥の主人公は、女性であることを否定することなく、自分の行動を制約するジェンダーから自由でいることが出来る。言い換えれば、山姥は、男装の女性とは異なり、「男らしさ」を強要されたり、「男らしさ」の演出の妨げとなる「女らしさ」を封じ込める必要がないのである。『まゆとブカブカブー —— やまんばのむすめまゆのおはなし ——』のまゆは、赤い帽子的怪物ブカブカブーが、何の抵抗も出来ずに、まゆの一撃で力無く崩れ落ちたのを見て、同情と哀れみの気持ちを禁じ得ない。また、『なないろ山のひみつ』の主人公は、祖母が身体の不調を訴えて苦しむ様子を見て、祖母に代わって、山を救うために、深い山の中にひとりで分け入る。さらに、『ドングリ山のやまんばあさん』の主人公の山姥は、山のカラスのひなの子守を引き受けたり、おいしい料理で客をもてなしたり、残ったごちそうを山の動物たちにわけてやったりする。このように、山姥は、コミュニティーの枠の外にいるため、家父長制のもとで、娘であり、妻であり、母であることを要求

されない、ジェンダー化されていない女性ではあるが、その女性性を否定したり、男性化することを要求されたりすることはない。そのため、男性と変わらぬ、いや、時にはそれ以上の超人的な身体能力を有しているのに加えて、ややもすれば、「男性的でない」と切り捨てられる、優しさや他人をおもんばかりの気持ちを表すなどの、「女性的な」行動もとることが出来るのである。この意味では、山姥は、女性は、(あるいは、男性は、) こうあらねばならぬ、という固定観念から自由であると言える。すなわち、現代の山姥は、男性女性のジェンダーにとらわれず、自由に力強く、心優しい生き方をしている、ある種、両性具有的な女性像なのである。このように、女性のジェンダーに縛られることがなく、また、男性のジェンダーにとられることもない山姥という存在は、幼い子どもたちにジェンダーの先入観なしに女性の主人公を提示しようとする作家にとって、格好の装置となるのである。

#### 4. 山姥と自然

山姥は、里の社会から隔絶された山中に住み、里の規範から全く自由である。このため、「山というトポスが山姥のアイデンティティ」<sup>6)</sup> であると言っても過言ではない。先に述べたように、民話の中の恐ろしい「他者」としての山姥は、現代の子どもの読み物の中では、解体され、因習やジェンダーから解放された女性像として再構築される。粗野で、怪力を持ち、自己の欲望に忠実な山姥は、文明に毒されない、素朴で無邪気な、愛すべき力強い主人公として、現代の物語の中に、よみがえるのである。

山姥は、因習にとらわれず、ジェンダー化もされていないという意味で、個人としての意志を持った、主体的で行動的な強い女性主人公として、子どもの本の中にその位置を占めるようになる。この時、本来、民話の中の山姥が持っていた、邪悪さや恐ろしさは削ぎ落とされ、粗暴さは、飾り気のない無邪気さに、自己の欲望をむき出しにするところは、意志の強さや主体性というように、変化していくのである。

一方、山姥のアイデンティティと言うべき、山というトポスもまた、解体され、再構築されて、現代の山姥像に大きな影響を与えている。本来、里に属せない山姥の座としての山は、人を寄せ付けない恐ろしい自然の象徴であり、里の人々の畏れの対象であったが、現代においては、工業化され、自然を搾取し破壊しつくしている都市(現代文明)の対極にある、優しく美しい自然の象徴となるのである。このため、山姥は、その自然を体現する存在としても意味を持ち始めることとなる。すなわち、自然に親しみ、動物たちと語り合い、山の中で自給自足の生活を送る山姥は、無機質な現代社会の非人間性を照射する存在へと変化してさえるのである。その典型的な例が見られるのが、『ドングリ山のやまんばあさん』である。やまんばあさんが山と町を行き来する時、読者は、自然と都市、そして、素朴な山の生活と人工物に囲まれた都会の生活の隔たりの大きさに気づくのである。

優しい自然の中で暮らす山姥という現代の読み替えは、山姥の人物像にもさらなる変化をもたらしている。自然と共存する山姥は、人間性の荒廃をもたらす現代社会に毒されていない無垢な女性、さらには、現代人の自然回帰願望を託す存在として位置づけられさえる。そのため、子どもの物語の山姥は、底抜けに明るく、好奇心旺盛で、素朴で無邪気

な性格に描かれていることが多い。例えば、やまんばあさんは、風の強い日には、揺れるハンモックで難破船ごっこをして楽しみ、山中で変わった足跡を見つけては、怪物探検ごっこをするというような幼い子どものような無邪気さと、カラスのひなの子守をしたり、動物たちにごちそうの残りを分けてやる優しい面を持ち合わせており、自然に逆らわず、自然と共に生きているのである。

山というトポスのために自然のプラスイメージと結びついた現代の山姥は、里のコミュニティと隔絶された存在としてのあり方にも変化を余儀なくされる。『ドングリ山のやまんばあさん』においては、本来、町の社会や価値基準とは無縁の山姥であるやまんばあさんが、里に属する人間と友情を結ぶのである。じいさん鹿から「恩返し」を教えてもらったやまんばあさんは、自分も誰かに助けてもらって恩返しをしてみたいと町に下りて行く。やまんばあさんは、何とか恩返しの対象を見つけ、自分を助けてくれた小さなおばあさんを山の頂上の自分の家に招き、ごちそうをしてもてなす。

楽しいひと時が過ぎ、おばあさんが町に帰る頃になると、やまんばあさんは、寂しくなってしまう。物語の語り手は、「やまんばあさんは、がっかりしたようにためいきをついた。楽しかった恩返しの日が終わってしまうのだと思うと、とっても残念だったんだ。それに、いっしょに、歌ったりおどったりした友だちが帰ってしまう時っていうのはさびしいものだからね」(p. 137)とやまんばあさんの気持ちを代弁する。やまんばあさんは、お土産に、一回鳴らせば、やまんばあさんの声が聞こえ、二回鳴らせば、やまんばあさんの歌が聞こえ、そして、やまんばあさんと遊びたいときには、三回鳴らせば、やまんばあさんが迎えに来るといふ、二本の竹筒を渡して、町のおばあさんとの繋がりを保とうとする。

畑の中におばあさんをおろすと、やまんばあさんは、にっこりわらって言った。

「じゃあね。今日は、恩返しオメデトウ！」

小さなおばあさんはいっしょんポカンとして、すぐにクスクス笑いだした。

「ずいぶん変なあいさつねえ。ふつう、友だちどうしなら、こんな時“サヨナラ。またね”って言うもんですよ」

そこで、やまんばあさんと小さなおばあさんはもう一度、おたがいに「サヨナラ。またね」とあいさつを交わした。

二本の青竹を持って畑の中を歩き出したおばあさんを、やまんばあさんがよびとめた。

「ねえ！……っていうことは、あたしとあんたは友だちってことかい？」

小さなおばあさんは立ち止まり、ふり返ってうなずいた。

「ええ、そういうこと」

「……っていうことは、あたしとあんたは、また、いっしょに遊べるっていうことだよ」

「ああ、もちろん」

(pp. 141-142)

ここで、やまんばあさんは、里との関わりを拒む本来の山姥のあり方から一步踏みだして、

町の人と心を通わせたいと思うような存在へと大きく変化している。すなわち、やまんばんあさんは、民話の山姥には、とても考えられない、人間的な温かい感情や、人との繋がり  
の必要性を感じるという側面を持つようになるのである。このように、民話の山姥は、解  
体され、再構築されて、多種多様な現代の山姥として、子どもの本における新しい女性主  
人公像となるのである。<sup>7)</sup>

## 6. おわりに

子ども向けの物語においては、冒険や勇気や活発さを表すには、男性の主人公が、優し  
さや受動性や不安を表すには、女性の主人公が、それぞれ選ばれる傾向がある。特に、女  
性像は、因習的な女性観にもとづいて、画一的に描かれることが多く、ステレオタイプ的  
でない生き方を求める女性読者のロールモデルとなりうる作品は、必ずしも多くない。そ  
のようなステレオタイプ的なジェンダーを排し、多様な女性像を提示する方法として作家  
たちはいろいろな手段を講じてきた。その手段には、フェミニズムの視点からのおとぎ話  
の語り直しや男女のジェンダーをわざとずらす試みなどがあり、その他に、女性登場人物  
の男装によって、女性のジェンダーによる制約を取り払う試みなどがある。小論で扱った  
山姥は、超人的な能力を持ち、ジェンダー化されている社会に属さないという意味で、主  
人公をジェンダーの制約から解放する装置として、近年、女性作家に好んで取り入れられ  
ることが多くなっている。このような傾向は、日本の児童文学に限ったことではなく、同  
じような理由で、近年の英米の作品においても、元来、悪魔の手先として忌み嫌われてい  
た魔女が、ジェンダーや社会の制約を打ち破る新しい女性像を体現する主人公として登場  
することが珍しくなくなってきたのである。

一方、民話の山姥を解体し再構築して生まれた、現代の物語における山姥は、現代社会  
に毒されない無垢な魂の持ち主として描かれることが多くなっている。さらに、山や自然  
の良い面を体現する存在としての役割も重要性を帯び始めている。さらには、現代社会に  
おける自然の破壊とその反省にもとづく自然への憧憬や自然回帰の願望が、山の中で自然  
と共存して生活する山姥の穏やかな姿を作り出していると言っても過言ではない。『ドン  
グリ山のやまんばんあさん』は、以下のような、自然に寄り添って生きるやまんばんあさんの  
描写で終わる。

山には、また静かに、静かに、まっ白い雪がつもっていく。でも、雪にうもれた  
クスノキのこずえでは、もう小さな新芽が春の準備をしていることを、やまんばんあ  
さんは知っていた。北風はするどい氷の刃みたいに林を切りつけてくるし、雪雲に  
おおわれた空は冷たい大理石みたいに光っていたけど。だけど、ちゃんと、春は近  
づいてくる。

だって、二百九十六年間、春のやって来なかった冬は、一度もなかったからね。

(pp. 145-146)



## 註

- 1) 新村出 (編) 『広辞苑 第5版』 (岩波書店, 1999).
- 2) 水田宗子, 北田幸恵 (編) 『山姥たちの物語』 (學藝書林, 2002), p. 13.
- 3) 富安陽子 (作), 降矢なな (絵) 『まゆとプカブカブー —— やまんばのむすめまゆのおはなし —— 』 (福音館書店, 2001), p. 1.
- 4) 征矢かおる (作), 林明子 (絵) 『なないろ山のひみつ』 (福音館書店, 2002), p. 12.
- 5) 富安陽子 (作), 大島妙子 (絵) 『ドングリ山のやまんばあさん』 (理論社, 2002), p. 6. 小論におけるこの作品からの引用は、すべてこの版により、本文中にページ数を記す。
- 6) 『山姥たちの物語』, p. 13.
- 7) 山とそこに住む山姥が、自然の良さや素朴な人間性や暖かみを象徴するようになると、山姥のアイデンティティである、里とは隔絶された山というトポスさえも、山姥であることにとって、必ずしも、必要不可欠ではなくなっていく。そのような変化を遂げた山姥が、にしざわきょうこの『“まちなば” ってしってる?』 (2003) に描かれる“まちなば” (町に住む山姥) である。なお、“まちなば” は、作者の造語である。にしざわきょうこ (作), みやもとただお (絵) 『“まちなば” ってしってる?』 (草炎社, 2003) 参照。